第４回 中之条町立六合中学校検討委員会 会議録

１　会議の名称　　第４回中之条町立六合中学校検討委員会

２　会議の期日　　平成３０年１２月２７日（木）

３　会議の場所　　中之条町役場　大会議室

４　会議に出席した検討委員

委　員	山本　隆雄	（中之条町議会　議長）	
委　員	篠原　文雄	（中之条町議会　文教民生常任委員長）	
委　員	山本　日出男	（中之条町議会　議員）	
委　員	大森　昭生	（共愛学園前橋国際大学　学長）	
委　員	細井　雅生	（高崎経済大学　地域政策学部教授）	
委　員	新井　小枝子	（群馬県立女子大学　文学部教授）	
委　員	新藤　慶	（群馬大学　教育学部准教授）	
委　員	安カ川　幸好	（六合地区区長会　会長）	
委　員	山本　秀明	（六合地区区長会　副会長）	欠席
委　員	中沢　博	（六合中学校　校長）	
委　員	山口　暁夫	（中之条中学校　校長）	
委　員	萩原　豊子	（六合地区学校評議員会　評議員）	
委　員	市川　昭一	（六合地区学校評議員会　評議員）	欠席
委　員	武藤　勝年	（六合中学校ＰＴＡ　会長）	
委　員	冨沢　陽子	（六合中学校ＰＴＡ　副会長）	欠席
委　員	篠原　直巳	（六合小学校ＰＴＡ　会長）	欠席
委　員	田村　一美	（六合小学校ＰＴＡ　副会長）	
委　員	清水　健介	（六合こども園ＰＴＡ　会長）	欠席
委　員	大谷　郁美	（六合こども園ＰＴＡ　副会長）	欠席

５　会議に同席した教育委員・職員

教 育 長	宮﨑　一
委員（教育長職務代理者）	登坂　初夫
委　員	清水　博巳
委　員	小菅　加代子
委　員	高橋　久夫
こども未来課長	宮﨑　靖

生涯学習課長　　冨沢　洋
教育指導係長　　矢嶋　将之

6　開会

午前１０時００分、会長、第４回中之条町立六合中学校検討委員会の開催を宣す。

会長より開会の挨拶。

（篠原文雄会長）

第４回六合中学校検討委員会のご案内を差し上げましたところ、暮のお忙しい中、多くの委員にお集まりいただき、ありがとうございます。これまで３回の委員会を重ねる中、委員それぞれのお立場からの貴重なご意見や、専門的な知見をもとにした協議など、充実した内容であったことを感謝いたします。こうした協議を踏まえて、最終的には、関係機関に答申して参りたいと考えております。本日の委員会も活発な協議となるようお願いいたします。

7　会議録署名人の指名

会議録署名人については、会長及び委員２名とする。会長の指名により、会長及び新井委員と安カ川委員とする。

8　協議

（１）会議録記載方法及び公開方法の確認について

事務局より資料に沿って説明がなされる。

・説明　資料１－１及び１－２「六合中学校検討委員会会議録」を参照。
委員名は、会議ごとの新規発言順に、ABC を付番する。
文章の体裁は趣旨を踏まえた要約とする。
公開方法は町教育委員会ホームページ上に載せる。

（会長）

詳細については、事務局一任とする。

（２）第３回検討委員会において出された質問への回答

・質問　中之条中学校でスクールバスに乗り遅れた場合はどのように対応しているか。
・回答　家族等の送迎により、登校している。

報告及び現状説明に対する質問

特になし

（３）意見交換

（会長）

今回、第４回の検討委員会ということで、引き続き、今後の方向性について、具体的な内

容の検討ができればと考えている。前回、委員から、選択肢１の、六合中学校の存続については、最初にする議論としては意見も出しづらいため、先に他の選択肢についてメリット・デメリットを考えていくことで、議論が深まるだろうというご意見を受けまして、選択肢２以降の分校化、中之条中学校への統合、近隣町村への委託について、委員各位から活発なご意見をいただいたところである。

その中で、選択肢２の分校化についての検討は、あまりメリットがないだろうということなので、一応一区切りをつけさせていただく。また、選択肢３の中之条中学校への統合についても委員の皆様から、発展した内容も含めご意見をいただいたところなので、ここまでの内容をもって、一区切りとする。

従って、本日は、選択肢４の「近隣町村へ委託すること」からご意見をいただくようにしたいと考えている。子ども達自身のメリットを最大限にするための手立て、また、デメリットを最小限にする手立てなど、想定されること等についてご意見をお聞かせ願いたい。その後、最後に選択肢１「六合中学校として存続」について、意見交換をしていきたいと考えている。

まず、学識経験者の委員から事例や情報提供等はないか。

A 委員

市町村や都道府県を跨いで委託している事例はあるため、本町でも実現の可能性はある。しかしながら、住所地の学校に通うことが基本であるため、受け入れる方の自治体が、受け入れるかどうかが問題になってくる。受け入れられるということになった場合でも、そのメリットとデメリットをよく精査する必要がある。本町の場合だと、メリットとしては、中之条中学校に通学するよりも通学距離が短くて済むため、生徒の負担軽減になることが挙げられる。また、学校規模が小規模である問題も、ある程度、解消されることが期待される。

しかしながら、前回までの議論の中で出された、長野原町の中で中学校の統廃合の可能性があるとの意見を踏まえて考える必要がある。例えば、長野原東中学校が六合中学校の生徒を受け入れることが、長野原町内の統廃合に影響が出るようなことも考えられるため、事前の詳細な相談が欠かせないだろう。また、他町村への委託を選択するときには、生徒は長野原町と草津町の近い方に通うようになることが想定される。その際には、六合地区の一体感が損なわれるだろう。六合小学校は存続するので、全て失われるということではないが、学校は地域という漠然としたものを可視化できるようにする働きもある。こうした選択をしていくのであれば、地域の拠り所、まとまりが薄まってしまう可能性を踏まえておくべきだろう。

B 委員

六合地区は広い。昔、湯久保の子は草津に通っていたこともある。また、現在でも町外の中高一貫校に通っている子もいる。子どもにとって適切な教育環境を整えるためには、学校を存続させるとか、させないとかではなく、子どもの将来にとって、どのような教育が必要かを考えた方がよい。六合地区の結束などを考える以上に、その一人の子どもの将来を第一に考えたい。もし、子どもが中学校に進学する際、長野原町と草津に分かれて、例え一人で進学するこ

とになっても、それが子どものためにならないとは言えない。近くて勉強しやすいところに通えれば、それが子どものためになるだろう。

六合地区の現状は、地域に子どもがいない。土日や長期休業中も近くに遊び相手がいない状況である。従って、子ども同士のコミュニティは既に全く存在しない。中学校は子どもにとってとても大事な時期なので、ある程度の人数のまとまりを保証してやりたい。そのことが、今一番検討すべきことだと思う。

A 委員

六合中学校の存続にこだわるわけではないが、一つの考え方として、地域のまとまりについては、子どもたちにとっても意味のあることであることを付け加える。子どもたちにとって、ふるさととか故郷というものは非常に大きい存在であり、自分の根っこになるようなものである。

もう一つ、学校規模の問題についても、子どもの学習環境として、小規模がよいのか、大規模がよいのかは、教育学の中でも決着がついていない事柄である。それぞれに合わせた教育の在り方があるということになっているので、一概に小規模だから不適切であるとは言い切れない。小学校と行事の連携を深める等、やり方は色々あることを踏まえて議論を進めたい。

C 委員

今年も六合地区総合文化祭が開催された。ここでは、こども園、小学校、中学校の発表もあるが、特に六合中生は進行も担当している。子どもたちにとって、この文化祭という場が、地域のお年寄りや文化を守ってきた方々との触れ合いの場になっている。

しかしながら、もし、六合中学校がなければ、文化祭が成り立たないというところまできている。一方、中学生にとってみても、よい経験が積める教育の場になっていると思う。単純な学力だけでない力を養うのに役に立っていると思うので、地域と学校を切り離して考えることはできないと思う。

B 委員

これまでの、六合地区の学校統合の経過を考えれば、わかってくることがある。昭和３０年代、元山分校、長平分校、品木分校、南小学校があった。田代原には分校がなかったので、片道４ｋｍの雪道を歩いて通ったが、概ねそれぞれの地域の近いところに学校があった。その後、子どもが減り、学校が減った。その都度、村の中で議論があったが、その中で、長野原に通わせるという案もあったが、結局は同じ六合地区であることを優先させた。時代が進んで、入山小学校の児童数が減った時に、第一小学校と統合して六合小学校になった。中学校も入山中学校と統合して今の六合中学校ができた。その都度、地域の大人が議論をしてきたが、最後は子どものことを考えて、ある程度の学校規模で学ばせてやるという決断をしてきたという経緯がある。

こうした経緯を踏まえると、地域も大事であるが、子どもの将来を見据え、できるだけ良い

教育環境で学ばせることについて考えることが、議論の中心であると思う。

六合地区の文化祭も大事だが、中之条中学校の吹奏楽部や駅伝部が関東や全国を見据えて活躍をしているのを見ると、そこで子どもが大きく成長しているように思う。そうした場を子どもに与えてやりたいし、そのように場を提供することが、私たち大人世代の役割であろうと考える。

D 委員

他町へ委託する場合について、六合中学校の保護者懇談会等での、保護者の意見を紹介する。地域に学校がある安心感について話しをする保護者がいた。例えば、生徒が学校で体調不良を訴えたときに送迎することを考えると、学校が近いと安心であること。また、他町村の学校に対して、今までのように意見が言えるかどうか、不安があるようでもあった。地域に学校があればそのような心配はないだろう。

また、町外の中高一貫校等に進学することは、ご家庭の選択肢として問題ない。逆に、地元の学校に通いたいという希望がある場合、その選択肢が用意できないのはいかがなものだろうか。中之条町に住んでいる以上、中之条町で教育が受けることが基本であると思う。

学校規模によって、できることとできないことがあるのは事実である。しかしながら、小規模であることが全てデメリットではない。大きい学校に通わせたいと考える保護者がいることも事実であり、それはご家庭の選択肢として認められることである。しかし、六合中学校に通わせたいという希望が、選択肢ごとなくなってしまうのは、好ましくないと考える。

E 委員

草津町、長野原町に分かれて進学する場合、小６の児童が等分に分かれるわけではない。中学受験をする子もいるので、児童数の少ない学年は特に、偏りが出ることになると思われる。小６までの仲間と別れて、一人で進学する子どもも出てくるだろう。親としてみれば、可哀そうに思う。大きい学校で、部活動の選択肢があるのはメリットであるし、全国大会に出場するような強い部活動に入りたい子もいるだろう。その一方で、子どもの性格にもよるが、一人でそのような学校に通ったときに、そうした部に入る気力があるかという疑問もある。もともと少人数であるものが分かれてしまうと、集団を受け入れてもらう感じはなく、個人個人がその学校に行くというだけのようになってしまう。中学校に行って仲間が増えれば、遊びの幅も広がるという意見もあるが、現状、地区内でも親の送迎がなければ遊び相手がいない状況である。まして、長野原町や草津町では、子どもが自力で遊びに行くことはできないだろう。

F 委員

部活動はできるか、通学はどうか、遊び等集団での活動はどうか等、議論は出尽くしているように思う。子どものためにという言葉が聞かれるが、中学生自身に選択権がないという現実がある。中学生に対して、急に六合中学校に通えなくなることについて、受け入れさせたり、納得させたりすることができるだろうか。よく考えなければならない。

議論は出尽くしたように思う。ここまで検討した選択肢に対しては、「これで行こう。」という積極的な議論にはならなかったように思う。この辺で、選択肢１についての議論を進めた方がよいと考える。

G 委員

中之条町も人口減少が続く。30 年後には 9,000 人程度になるという推計も出ている。他町村に委託する選択肢もあるが、吾妻の他町村であっても、人口減少の傾向は同様である。従って、この問題は吾妻全体で協議していく必要があるだろう。その議論に火をつけるのが、本委員会であってよいと思う。他町村でも、いずれ本委員会と同様な議論がはじまるであろう。給食費の無料化の流れや施設の老朽化の問題などもあるが、そうしたことも含めて、吾妻全体で議論できるようにてしていく必要があると感じている。

（会長）

この件に関して、教育長より現状の様子など、情報提供が可能か。

（教育長）

昨年度 2 月 14 日、広域圏の理事会に出席した折、郡内 8 中学校の、今後 10 年間の生徒数の推計について、資料を提出して参りました。これは、教育事務所の把握しているデータを元に推計したものであります。この会は、理事長である本町の伊能町長をはじめ、各町村の首長も出席しております。各町村とも生徒数の減少という課題を抱えている中、各教育長及び教育委員会で、この件に関する調査及び研究を進めるように承って参りました。そして、現在、6 町村には今年度の生徒数で新たに作成した資料を配布し、各教育委員会で議論していただくよう依頼をしております。

前回の教育長会議で出た話を紹介しますと、校舎の建て替え等が必要な町村もあるが、今後の児童生徒数の減少を踏まえると、なかなか踏み切れない状況にあるということでありました。また、吾妻全体で、町村を越えた学校の編成というものも、一つの方策になっていくだろうという話も出されました。

今後は、各町村単位で完結できない状況になっていくだろうと思われます。小学生を 1 時間かけて通学させるのは、大変だろうと思いますが、中学生になれば、体力も付いてくるので、1 時間以内であれば、可能であると考えます。吾妻で一つの中学校は無理でも、東西で考えれば、通学も可能と考えられます。しかしながら、これは、まだ、議論がスタートする段階の話ですので、本検討委員会においては、現状、域内の子どものために、まずは六合中学校の在り方を中心にご検討いただければと思っております。

G 委員

教育長の話を踏まえると、本委員会も、それに近づけていく必要があると考える。

（会長）

本委員会は、六合中学校の在り方に絞って議論を進めていくようにする。

H 委員

そろそろ選択肢１についての議論に入ってもよいだろう。町外への委託については、受け入れ先との協議によるところも大きいので、ここでの議論には限界があるだろう。

I 委員

同様に考える。選択肢４については、議論の内容が変わらなくなってきているように思う。また、先程、六合地区の統廃合の歴史について伺ったが、そこで行われたであろう議論と、本委員会で話し合われている内容は少し違うものであると考える。中之条町の中にある、六合地区という地域を大切にしたい。この地区がバラバラになることのマイナスがあまりにも大きく、どのような意見を聞いても、その思いが拭えない。選択肢１について、六合中学校として、どのように存続していけるのか、また、今のままではなく、どのような方向性があるのか、という議論に入るのがよいと考える。

（会長）

選択肢４の議論は、一区切りして次に進んでよいか。異議がないようなので、次に進めることとする。

H 委員

選択肢１のあるべき学校の姿を検討し、また、それができるのか、できないのかによっても判断が変わってくると考える。

今のまま、何もせずに存続を選ぶというのならば、それには反対する。子どもたちの学びを考えたときに、少人数のよさがある一方、今、求められている学びをと照らし合わせたときに、何の対応もせず、ただ存続を選ぶというのは、違うだろうと考える。

選択肢１のあるべき学校の姿を検討したうえで、それができないというときに、選択肢４の近隣町村への委託等について考えていくことになるのだろうと思う。選択肢４のデメリットの大きさを理由に、存続を選ぶのも違うと考える。

まず、存続させることを前提とした私案を申し上げる。今、子どもたちに求められている学びを保証するためには、ある程度の多様な仲間との交流の中で、多様な意見を交わしていく環境であることや、主体的で対話的な学びであること、また、これから AI 時代を迎える中で、ICT との関わりとか、グローバル化など、こういった環境がしっかりと担保されることが必要だろうと考えている。

部活動については、もちろんできた方がよいが、部活動本来の目的は、基礎的な体力づくりや自治的な活動をする中で協働的な体験をしていく、あるいはリーダーシップやフォロワーシップを学んでいくとうことであって、競技スポーツの目的とは別物であるといえる。こうした

ねらいは、必ずしも部活動でない場面でも、学びを得ていくことができると考えられる。

理想を語るとすれば、まず、小中学校を統合して義務教育学校化をしていくことを検討すべきだと考える。大人の立場からの話になるが、一つの学校にすることによって、人件費も含め、教育にかかるコストが集約される。そして、その浮いたコストを使って、より豊富な教育環境を整えていくという方法が考えられる。もう一つは、中学生が、横の広がりではなく、縦の広がりの中で、小学生の世話をすることや、学びの支援をするサービス・ラーニングの体験を得るチャンスが日常的に得られることである。また、今後、小学校英語の教科化が進んでいくことを踏まえると、一人の英語の先生で小学校から中学校までの英語の授業が見られることもメリットと考えられる。更に、浮いたコストの中から、ネイティブの先生を入れることもできるだろう。管理職の先生も一人ずつでよくなるので、このようなところで浮いたコストを使って、教育環境を整えていく。

また、本町に限らず、全国各地で学校の小規模化の問題について議論をしているが、解決策の一つとして、ICT 環境の整備が提案されている。これを推し進める NPO なども増えつつある。例えば、共愛学園では、ICT によりフィリピンとつないで、1 対 1 で英語の学習を進めるなどの取組が既になされている。Wi-Fi 環境の整備等についても、学校規模が小さいので低コストで実現できるだろう。このように、他の中学校や海外の生徒とのディスカッション等を通じて、多様な意見や考えに触れる機会を確保するとともに、グローバル化に対応していく。

これに加え、学校のコミュニティ・スクール化も推進する。文部科学省の支援を受けながら学校運営協議会を設置し、横の交流が難しくても、縦の、地域との交流を活性化する。今も十分やってもらっていると思うが、中学生がリーダーとなって、大人を動かすようなことを教育プログラムに位置付けてやっていけば、現在、小規模であるために足りていない教育環境を、大分、補っていけるだろうと考える。

これまでの議論を聞いていると、近隣町村に委託するメリットも感じるが、学校規模等を考えると、中之条中学校に通えるのであれば、その方がいいと思っているのが本音である。しかし、それが難しいとすれば、学校の魅力を高めるために、学校の義務教育学校化、ICT 環境の導入、そしてグローバル化、コミュニティ・スクール化を推進していくことは、決して難しいことではない。こうした取り組みをやっていくのであれば、存続という判断もあるかと思っている。また、そこまでやる覚悟を持たず、簡単に存続させると言ってはいけないのではないかとも思っている。

F 委員

ただ今のご意見を基にして、選択肢 1 の議論へ進みましょう。

A 委員

ただ今の意見の方向性で、補足して意見を述べる。義務教育学校については、そのような発想があってよいと考える。カリキュラムや人員の配置の面からは、ご意見の通り、望ましいことであるが、校舎の維持管理のコストについても、学校統廃合の事例として、耐震補強の必要

に迫られたときに、新校舎の建築や耐震補強工事の予算が確保できないために、廃校になっていくという事例が多くある。義務教育学校ならば、校舎は一つで済むことはメリットであり、現実的な選択肢としてあり得るだろう。学校規模の問題については、群馬大学の事例を紹介すると、現在、群馬大学は宇都宮大学と共同教職課程の作成を進めている。これは、学生数の減少に伴い、教員数も減っていくと、中学校の全ての教科の免許を取得させることができなくなるので、宇都宮大学と合わせて可能にしようというものである。具体的には群馬大学の学生が宇都宮大学の先生の講義を遠隔で受講したり、またその逆のことを行ったりするようなことである。大学に限らず、義務教育段階でも、授業展開によってはこうした措置が必要になってくるだろうと考える。先月、北海道で行われた、教員養成系大学のへき地教育や小規模校教育の研究大会に参加してきた。そこで聞いた話だが、北海道の自治体はそもそも面積が広く、子どもの数が減っても、他町村等に行くような選択肢がとれないケースが多くあり、そのような環境の学校では、ICT の活用により教育環境のデメリットを補っている。本町ならば、六合中学校と中之条中学校を ICT で結び、互いに交流して学習を進めるといったこともあり得るかと思う。

また、先程のご意見に付け加えるならば、特色ある学校づくりができれば、六合地区以外から、それを目当てに来る子どもたちが出てくる可能性があるということである。特認校制度を活用すれば、中之条地区に住む生徒が六合中学校に通うことも可能になる。更に、現実的には検討を要するが、山村留学という手立ても考えられる。

先程から、小規模はデメリットという議論が続いているが、教育学一般には、小規模の方が望ましいと考えることが多い。小規模であることは、子どもと先生の距離が近いことや、きめ細かく対応できるためである。一方、大規模だと子どもの問題を見落としたり、個々の学習の進度を把握することが難しくなったりする可能性がある。従って、小規模校であることを、メリットとして打ち出していくという取組があってもいい。

F 委員

小学校と中学校のどちらの校舎を使用するかなどは後の議論になるとして、基本的には、先程のご意見をベースにして、具体的な議論が深まるとよいだろう。ここまで、語学教育の議論と少人数教育の議論が出てきたが、これに付け加え、コミュニティ・スクールの意義について申し上げる。六合中学校には地域研究の素晴らしい伝統がある。地域の大人と交わり、地域の歴史や伝統を自らの言葉で再構築し、冊子にまとめるような学習は、地域にとっても、地域を残し、また生かしていくうえで大きな基盤になってきたはずである。コミュニティ・スクールは多数存在するが、本当の意味で運用されているところは少ない。六合地区は、既にこのベースをもっている。この地域研究に、小学生や地域の方々を巻き込んでいくとう方法論もあり得ると考える。この後は、先程の４本柱に肉付けをしていく作業を始めていくとよいだろう。

I 委員

吾妻郡全域の中学校の在り方についてのご意見があったが、義務教育学校化やその運営の仕

方、教育課程の組み方など、新しい六合中学校がそのお手本になっていくように思う。

C 委員

小中学校がもっと近くになければいけないと思っていた。今後、その方向の議論が深まるとよい。

J 委員

湯久保地区は小中学生がいなくなり、寂しい。原町や中之条に転居していく家庭も増えたが、一方で、六合地区に転入する方もいる。いずれの方法論にしても、今後、生徒数が減っていく中で、町が経費を負担することになるだろうから、どのようにしたら経費を少なくできるかも同時に考えていく必要があるだろう。

義務教育学校にして特色のある教育をすることや、山村留学等の手段を講じていけばよいというご意見を聞いて、そのように学びの場を充実させて、存続の方向で進められたら有難いと思った。色々な付加価値を付けて、特色のある教育を推進できるようにしてもらい、存続となれば有難いと考えている。

I 委員

今までの六合中学校ではなくて、先程の４本柱を組み込んだ新しい六合中学校ということになれば、中之条中学校区の子どもたちも、希望すれば六合中学校に通えるようにするとよいだろう。町全体として考えれば、教育の選択肢が広がることになる。

K 委員

２学期中の、六合中学校と中之条中学校の交流活動について、現状を報告する。まず、いじめ防止子ども会議を、六合中学校を会場にして開催した。六合中と中中、中小、六合小の４校の代表児童生徒が集まって話し合いをした。今年度は中之条中学校の生徒が司会進行を務めた。この会議のために、六合中学校の生徒が一生懸命に原稿を作成してきていたが、きめ細やかに先生方の指導が行き届いている印象であった。中之条中学校、六合中学校ともに生徒の勉強になっていたと思う。

また、中学３年生を対象に性教育の講演会を合同で行った。六合中学校だけであれば７名に対してだけ行うところを、大人数の中で一緒に講演を聞くことができた。大規模校でも小規模校に負けるところはある。また、小規模校でも大規模校と交流することはできる。今後、更に交流できることを洗い出していくこともできるだろう。

（篠原会長）

本日は、六合中学校の存続についての意見をお聞きすることができた。本日はここまでとするが、次回、更に深い議論ができるよう、よろしくお願いしたい。

９　その他

F 委員

今回、議論に上がった４本柱について、事務局より資料提供は可能か。

（教育長）

一般的な資料であれば、用意することは可能であります。

F 委員

当日配付でよい。義務教育学校、コミュニティ・スクール、ICT、グローバル化について、事例等を用意願いたい。

（教育長）

ご用意させていただきます。学識経験者の委員には、ご専門の分野もあろうかと思いますので、資料等のご提供について、ご協力いただければ有難く思います。

I 委員

併せて、六合中学校における世代間交流活動の現状についても、事例等を用意していただきたい。

（教育長）

該当校の校長に資料作成を依頼し、説明をさせるようにいたします。

１０　次回検討委員会の日程について

日程調整をし、通知することを確認。

１１　閉会の宣言

午前１１時４０分、会長、第４回中之条町立六合中学校検討委員会の閉会を宣す。